特集　タマネギの機械化栽培技術

1 は　じ　め　に

兵庫県のタマネギ栽培は、平成８年度作付け面積が2,754ha、生産量は147,40
で全国第２位の地位を占めており、「淡路玉葱」のブランドで販売され、全国的にも有名である。

新たな米政策のもと、生産調整目標面積が大幅に拡大された中、転作対応に野菜作のウェイトが増加し、新興産地での生産の取り組みも始まっている。

本県のタマネギ生産は作型が多様で、早生、中生、晩生の品種が栽培され、収穫出荷法も青切り、短期貯蔵、遅植え短期貯蔵、冷蔵貯蔵などに分かれている。生産の中心的な担い手は昭和一桁世代が引退する時期に遭遇し、深刻な労働不足のまっただ中にある。手作業が主体であり、労働が過酷になっている。

苗取りや定植作業は、無理な姿勢での作業であり、厳しい環境、低温屋外での長時間作業をあげることができる。

そこで産地の維持のため、省力機械化栽培の実用化に向け、試験研究、行政、指導機関、農協、民間が一体となった技術開発の取り組みにより、歩行式の収穫機が急速に普及し、現在移植機が開発されつつある中、機械化体系の確立が急がれている。

今回の特集ではタマネギ生産動向と省力化軽作業化を目指した機械化一貫体系のモデルを提示し、移植、収穫作業の研究成果、普及技術を紹介する。

置塩　康之（中央農技・経営実験室）